

父が他界して、早7年の歳月が流れます。父を思うとき、心からの看護を受けたことに、決して忘れられない感謝の気持ちで胸が熱くなるのです。

95歳まで店の売上を数え、記帳してがんばってくれた父。でも年齢とともに、飲み込む力が徐々に弱ってきていたのでしょう。誤嚥性肺炎を起こし、呼吸が困難になり、車で20分程の病院に緊急でお世話になりました。主治医をはじめ、看護師、スタッフ一同、とても良くしてくださいました。6日目に入り、看護師から「ホントにホントに考えられないほど、次夫さんががんばっているのよ」との言葉がありました。私はその言葉がとても気になり、一晩中、父を見守りながら考えました。そして、思い当たったことは「母に会いたい一心なのでは」と。

翌朝、主治医に「父がこんながんばっているのは、母に会いたい一心だと思うのです。母はストレッチャーでないと来られない状態です。どうか承諾していただけないでしょうか」とお願いをしました。

主治医からは「皆と相談します。20分待ってください」と、そして「家族の思いに添います」との言葉に涙が流れました。ありがたくて、うれしくてとても心に染みるお言葉でした。すぐに家に戻り、母を連れ、「この橋を渡ると病院が見える、もう少しだ」と思ったそのとき。「次夫さん、もう危うい」との連絡を受けました。

母を1秒でも早く父の元へとと思う皆の心が一つになって、4階の病室を開けたとき、奇跡が起こったのです。父の顔ぎりぎりに母の顔を寄せました。すると閉じていた父の目が静かに開き、母の顔を確かにしっかり食い入るように見たのです。看護師が手と手を重ねてくださいました。それから1時間後、父は穏やかな安心した顔で旅立ちました。あの光景は家族皆の生涯忘れえぬ大切な宝物となりました。「人に寄り添うことが看護である」。この言葉通り、父の命の炎を最後まで大切に、そしてその素晴らしい看護プレーを見させていただいたのです。

これは、「第8回忘れられない看護エピソード一般部門入選」作品である。実はこの筆者は、梁川高校の教員であるN先生のお母様である。私は毎朝、作品に出てきた「お店」の前を通過して通勤している。「文は人なり」という。お会いしたことはないが、どんな方なのか想像がつく。

私の父は、2年前に亡くなった。母から連絡が入り、病院に駆けつけた。高齢であるため手術はしないほうがよいとの医師の判断だった。母も兄もその言葉に従った。2週間ほど入院したが、意識が戻るわけではなかった。結局、父の最期の言葉を聞くことはできなかった。生前も何年もの間、満足な会話もしていなかった。それは、反抗期を迎えて以来ずっとである。長い。長すぎた。

それでも、自分の成長過程において父の影響を受けていることはよく理解している。似ているのである。親子だから仕方がない。結局、父がどんな思いで生きてきて、どんなことを残したかったのかわからない。だが、きっとこうであろうと考えることはできる。それが、背中で教えるということか。

N先生のお母様は、実は教員になりたかったのだが、家業であるお店を継ぐために断念したのだとN先生から聞いたことがある。N先生は言っていた。「私は母の思いも背負って教員をやっています」N先生のご祖父とご祖母の関係、奇跡を起こしたお母様、そしてN先生と脈々と受け継がれているものがある。

私の娘は、悲しいかな私に似ている。似なくてもいいところほど似てしまう。そのためにきっと苦勞するに違いない。それでも私の父、私、そして娘へと受け継がれているものがあるはずである。それは、形には見えないが、その人の人生を支えるバックボーンになるうるものである。

父が亡くなってからめっきり元気をなくした母が気になる。もともと小さい母が余計に小さく見える。あんなにハキハキとしていた母でもこうなってしまうのか。少しでも母を喜ばせてあげたい。これから年末年始を迎える。2人の孫である私の息子と娘を連れていくことが一番である。